# 日本の「心の哲学」に未来はあるのか？

柴田正良(金沢大学 教育担当理事)

科学基礎論学会60周年記念
分野別ワークショップ
慶応大学三田キャンパス
June 15, 2014

# たぶん、あまり元気のいい未来はない

１．これまでの日本の哲学者の動機

　大森荘蔵、坂本百大、黒田亘、吉田夏彦、等の世代の哲学者にとって、心の哲学はメイン・テーマではなかった。

　心的現象が本来の問題であったというより、各自の哲学的主張（例えば、立ち現れ一元論）の応用問題にすぎない。

２．わずかな例外を除き、心身問題そのものすらも、自立した探求領域とはならなかった。

　オーストラリア型の心脳同一説は、日本でほとんど何の影響も与えていない。

# 輸入哲学と、輸入しそこないの「心の哲学」

１．結局、わずかな例外を除き、いまでも日本の哲学は輸入哲学である。

当時、輸入元であった英米系の哲学は、ウィトゲンシュタイン、ライル、カルナップ、クワイン、セラーズ、等の言語哲学が主流。

⇩

言語による虚構としての＜心＞が、おおむね日本の「心の哲学」の基調であったと思われる。

２．それ以後、英米系の「心の哲学」の本来的な動機を真に共有することがなかったがゆえに、日本の「心の哲学」は輸入にすら失敗した。そもそも「輸入」が情けないが･･･

# 英米系における論争の構図･･･1
# （心的因果を中心に）

還元的物理主義：性質一元論（タイプ同一説）、1950年代･･･プレイス、スマート、ファイグル、アームストロング

非法則的一元論
（非還元的一元論）
デイヴィドソン(1960年代)
弱い supervinience (WSV)
（性質二元論？）
行為論と存在論

機能主義（個別法則科学の自律性）
パトナム（1960年代末）
多重実現（MR）
（性質多元論？）
人工知能と認知科学

# 英米系における論争の構図･･･2
# （心的因果を中心に）

非法則的性質の因果的効力

キムによる反WSV

過剰決定と選言性

キムによる反MR

（心的性質の因果的不活性）

心的性質の因果的効力の確保

心的性質の法則性の確保

キムによる機能的還元

キム的な還元的物理主義

# 英米系の「心の哲学」の本来的動機と反動

１．コンピュータ･サイエンスと人工知能研究、認知科学と理論的言語学の爆発的進展への、哲学の反応。

これらの科学と整合的な説明関係に立つ「心の機能主義的モデル」を構築すること

２．機能主義を支える存在論的な基盤を提供すること

非還元的物理主義を構築すること

３．反動は、機能に還元困難な心的現象、クオリアや意識からやってきた。

チャルマーズやジャクソンらの反物理主義

# 日本の哲学者には、そのような動機がない

１．日本の哲学とそうした科学は、不幸なことに、ほとんど接点をもたない。科学との生産的な関係がない。

例えば、フォーダーの「思考の言語」や、チャーチランドの「心のコネクショニズム」のような、科学者を「走らせる」哲学的モデルを提出したためしがない。

⬇

２．日本の「心の哲学」は、英米系の根本的動機と背景を欠いたまま、今もせいぜい、自分の哲学的直観と常識だけを議論の指針としているにすぎない。

あとは、自分の好みに合う輸入哲学者の翻訳をするか、その代弁者となっているだけだ。

# 哲学的直観と常識だけでは、明日はない

１．この2つだけで、あとは哲学史の知識と哲学の議論しか知らない若手にとって、「心の哲学」は、最も参入しやすい領域かもしれないが、ほとんど何も生み出さない単なる「知的ゲーム」（蛸壺）の世界にしかならないであろう。

２．閉じた哲学的領域内で、いくつかの整合的な説明体型に辿り着くことはできるかもしれない。しかし哲学的直観と常識と哲学史の知識だけでは、その先に進むことはできないだろう。

３．そもそも、そのような若手にとって、論文の自己目的的な生産以外に、「心の哲学」をする動機があるのだろうか？

# そのような些細な事例
# 心的因果を巡る美濃･柏端・柴田による論争

１．論争は、1994年の科学哲学会(北大)におけるWSから始まり、幾多の論文の応酬、シンポ等でのやり取りを挟み、2009年の応用哲学会(京都大)でのWSを越えて現在も続いている。

２．これは、日本の哲学者同士が論争を回避し、相互に黙殺する傾向にあることからすれば、一定の評価に値しよう。

３．しかし、世界的に通用するような成果は何も生み出していない。はあ～。

# 論争の基本構図

１．心的性質に因果的効力があるはずだ、という特別な宗教的、科学的確信などは、誰ももっていない。

２．美濃は常識的直観に従い、柏端は形而上学的直観に従い、柴田は非還元主義的直観に従った。

３．おおよそ、美濃はJ.キムの代弁者となり、柏端はD.ルイス(？)、柴田はD.デイビッドソンの代弁者となった。

４．科学がこれに影響を与えることも、逆に、これが科学に影響を与えることもなかった。

５．この構造は、服部裕幸、戸田山和久を加えた、コネクショニズムに関する論争でもほぼ同じである(あるいは、信原幸弘が参加した他の幾つかの論争でも)。

# 何がダメか？

１．哲学的直観なぞは当てにならない。そもそも誰が、そんな上等なものを持っているのか？

２．常識は、尊重すべきだが盤石ではない。改変や破棄の提案は哲学の仕事である。

３．哲学史の知識は、おおむね役に立たない。役立たせるほどそれを知ったときには、老人の哲学史家になってしまう。

４．輸入テーマや輸入テクニックは、動機と背景を真に共有していない限り、単なる流行病である。

５．哲学(関係者)に閉じた議論は、自己満足以外、他の領域にほぼ何ももたらさない。

# 脱出への道

日本の「心の哲学」の基本的立場は、還元的だろうと非還元的だろうと、現実世界は少なくとも「自然的supervenience」の成立する可能世界だ、という物理主義的前提を崩せないだろう。

⇩

1. 「心の哲学」を、科学の関連領域との連携で展開する。脳神経科学、認知科学、ロボット工学などとの積極的な問題交換。意識とクオリアの問題は、閉じた議論にしかならないかもしれない。
2. 物理主義がもたらす倫理的問題圏の動揺と、物理主義的倫理学の構築。
3. 議論のテーマと手法を輸入物で賄うのではなく日本ブランドを育て、英語論文を一般化し、国際標準のレベルに上げる(あるいは、日本語論文が英語(外国語)に訳されるまでにする)。

# 若手人材の育成

そのためには、従来の哲学系大学院教育はほとんど役に立たない。

１．哲学史･哲学文献の精読はいい加減にして、数学･論理学系のツールや、生物学、脳神経科学、工学など学生のテーマに関連する基礎訓練を受けさせる。

２．世界と繋がるために論文は基本的に英語で書かせ、学会でも英語で発表させる（西洋哲学研究が日本語で行われている現状は、理系には理解されない）。

３．哲学研究室を文学部系の建物から、理工系･医薬系の建物に移し、学生の異領域交流を日常的にする。

４．哲学系以外からの大学院進学者を優先する。

# というわけで

他にも幾つか策は考えられようが、明治以来、輸入と哲学史のおさらいに没頭してきた歴史を変えるのは容易ではなかろう。

内部から見れば、こんなにも希望のない日本の「心の哲学」だが、それでも世間はまだ、根拠のない幻想を「哲学」に抱いている。

どっちにしろ、今が最後のチャンスかもしれない。

なお、本発表のために、冬のような春の仙台で、議論につきあって下さった美濃正氏（大阪市立大）と伊藤春樹氏（東北学院大）に、この場を借りて深く感謝申し上げたい。

# おしまい

柴田の研究関連webサイト

http://siva.w3.kanazawa-u.ac.jp/